

## 第4分科会 通常の学級での取組

## 「“できたよろこび”を感じられる子の育成を目指して」

～すべての児童への一次的支援の充実と

ユニバーサルデザインを意識した授業づくり～

静岡県焼津市立大井川南小学校 教諭 葛西 恵美

教諭 小川菜々子

## I 実践に当たって

## I テーマ設定の理由

本校において、個別の教育支援計画・指導計画を作成している児童、学級担任が支援が必要だと考える児童は全体の28%にのぼる。更に、外国にルーツをもつ児童が全校児童の18%在籍しており、合わせると全体の46%が特別な支援が必要な児童である。特に、読み書きの困難さも抱えている児童が多い。そこで、一部の子どもに向けた支援ではなく、通常学級の全員を対象に、どの子も持っている力を最大限発揮できる配慮と支援として“一次的支援”を充実させることが大切であり、そうすることで、子どもたちの学習への参加度や理解度が高まり“できたよろこび”を感じられる子が増えるのではないかと考えた。また、「教育における三つのユニバーサルデザイン（教室環境・授業・人的環境）」に学校全体で取り組むことで、子どもたちが抱える学校生活や授業でのバリアが取り除かれ、子どもたちが“できたよろこび”を感じ、学習へ積極的に向かうようになると考え、本テーマを設定した。なお、これは令和2年度の実践をまとめたものである。

○本実践における“一次的支援”のとらえ&lt;参考&gt;【学校心理学における3段階の援助サービス】

- ・一次的支援とは、すべての子どもを対象とし、一般の発達過程に起こりうる問題への対処能力の向上を支援する予防的、開発的支援。
- ・二次的支援とは、問題を抱え始めている子どもをスクリーニングし、その問題が重大化しないように早期発見、早期介入を目指す支援。
- ・三次的支援とは、不登校や発達障害など、問題を抱える子どもを対象とし、個別の支援について適切な関係機関と連携を図りながら実施する支援。

## II 実践内容

## I ユニバーサルデザイン（以下UD）化への取組

令和2年度より研修部を“研修推進班”と、基礎学力の向上や学習のUD化に特化した“学びの基礎班”の2班編制とした。令和2年度は、教室環境のUD化と、授業のUD化を中心に取り組み、3年1組をモデルクラスとして実践した。

## (1) 教室環境のUD化

令和2年度のテーマとして「揃える」を掲げ、子ども達が「揃っていることが気持ちよい」と思えたり、「当たり前を当たり前」にできたりする環境を作ろうと、学校全体で取り組んだ。

## (2) 授業のUD化

子どもが一斉学習に「参加（活動する）」できること、「理解（分かる）」に繋がることを目標に、取り組んだ。

## ①「聞く」への取組

本校児童には、「聞く力の弱さ」があると考えた。そこで、年度初めに学年や学級で目指す「聞く姿」について子どもと共に考えた。

## ②ICTの活用

本校では令和2年3月に電子黒板が全教室（一部特別教室を除く）へ設置された。認知の偏りをもつ児童を含め、電子黒板による視覚化・焦点化は、すべての子どもたちへ有効な手立てであると考え、積極的に活用した。

## (3) 人的環境のUD化

学級経営を軸に「クラスの雰囲気が柔らかく、児童同士が支え合えるような環境・関係づくり」「安心して過ごすことのできる居場所のある教室づくり」を大切にしようと、実践した。

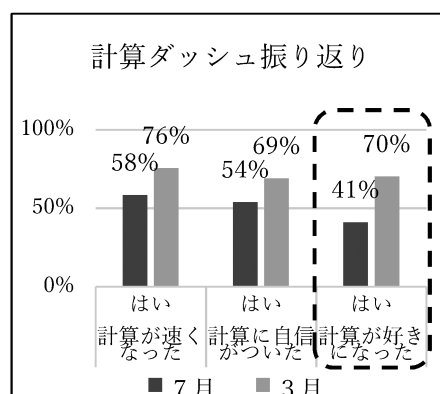
## 2 朝の時間に「南っ子タイム」を位置付け、基礎学力の向上を目指す

8：10～8：20の10分間に朝の学習の時間を位置付け、月曜日と木曜日に「計算ダッシュ」水曜日に読書、火曜日に「MIM」を実施した。

### (1) 計算ダッシュの取組

計算ダッシュとは、四則計算50問前後の計算プリントで、時間を記録し、繰り返し行うことにより四則計算の定着やスピードアップにつなげるものである。子どもが伸びを実感することで、計算に自信をもつことにつながり、学習へ前向きな姿勢が育つと考えた。

7月と、3月にアンケートを子どもたちにとったところ「計算が速くなった」「計算に自信がついた」「計算が好きになった」の3項目全てで、子どもの評価が上がった。特に注目したいのは、「計算が好きになった」の項目が7月は41%だったのに対し、3月は70%に上がったことである。教員のアンケート結果からも、子どもたちの学習態度の向上や計算のスピードアップが感じられたとの評価があった。



### (2) MIMの取り組み

学習の困難さの中には、特殊音節を含む“初期の読み”に困り感を抱える児童も多い。そこで、多層指導モデルMIMを行い、文字や語句を正しく読み書きしたり、滑らかに読んだりできることを目指した。MIMも計算ダッシュ同様に記録し、達成感を味わうことができるようにした。

#### ①モデルクラス（3年1組）における子どものあらわれ

個々の子どもの読み書きの定着度を担任と確認しながら、MIMを行った。年度当初3年1組では30人中27人が、「MIM-PM採点・活用ソフト」の判定において、個別の支援が必要な児童という結果であった。そこで、語彙の確認をしたり、つまずきが多かった問題を取り上げて指導したりした。すると、個別の支援が必要な児童が年度末には30人中10人にまで減少し、読み書きの力がついてきていることがわかった。また、アセスメントを通して、二次的支援、三次的支援のレベルにいる子どもたちの発見ができ、さらに特別な支援につなげることができた。

#### ②ひらがなやカタカナが未定着の児童への支援

当時2年生のAは、MIMにおいて無答が多く、ひらがなとカタカナの読み書きに支障をきたしていた。そこで、担任が「聞き書きプリント」を教室で活用したり、通級指導教室と連携したりして、ひらがなとカタカナが定着するように定期的に支援した。また、冬の面談時には保護者へ冬休みの取組として「聞き書きプリント」を繰り返し行うことを提案した。保護者の協力もあり、Aはひらがなとカタカナに加え、特殊音節も正しく読み書きできるようになった。(10月5/30問→3月30/30問正答)冬休み明けに通級指導教室へ来るなり「早くプリントをやりたい。出来るようになった所を見てほしい。」と担当に話す姿が見られた。このことから、Aが読み書きに自信を付けたことが分かる。担任からも「学習に向かう集中力が以前より高まっている。」という話があり、Aの学習意欲が高まったことがうかがえた。

## 3 3年1組の実践

### (1) 年間を通しての実践

#### ①目指す学級像・授業像の掲示

5月に目指す学級像・授業像について学級会を行った。それらを掲示し、いつでも目指す授業像について振り返ることができた。成果や課題を子どもたち自身で明確にしていくことで、子どもたちの目指す学級像・授業像への意識が高まり、集団として同じ方向を目指すことができた。

#### ②揃える

名札や筆箱は、朝の会の中でチェックを行った。「全員できて2日目」などと継続的な評価を行ったことで意識が高まり、揃えることができるようになっていった。また、時刻については、子ども同士で声を掛け合うなど、学級全員で授業の開始を揃えようという様子が見られた。

#### ③話す・聞くの目指す姿の共通理解

目指す授業像の話し合いで、話し方や聞き方の具体的な姿についてレベル表としてまとめ、掲

示した。繰り返し声かけをしていくことで、子ども同士で注意し合う姿や、反応しながら聞く姿が見られるようになった。目指す姿を明確にしたことで、良い姿を意識できるようになった。

#### ④学習形態の工夫

グループ学習では、話し合いの方法やルールが分かり、話し合いが上手になるにつれて人数を増やして話し合いを行うようにした。そうすることで、発表が苦手な子どもも、自分の意見を言うことができるようになっていった。また、発表が得意な子どもも少人数の場で話すことで、考えを整理して、よりわかりやすく発表できるようになった。話し合いの内容をホワイトボードにまとめることで、似た意見を見つけたり、意見を一つに集約したりする力が付いた。

全体学習では、グループで話し合ったことを全体で共有するときに各グループのホワイトボードを黒板に貼って説明するようにした。そうすることで、聞き取りが苦手な子どもは、ホワイトボードの文字を確認しながら、聞くことができ、意見を聞きやすくなった。

#### ⑤電子黒板の活用

ノートを書くときには、子どものノートと同じ物を電子黒板に映し、書き方を示した。それにより、ノートの書き方が定着した。年度末に行った子どもへのアンケートでも、「ノートを書くとき、電子黒板が役に立った。」という回答があった。また、発表をする時に、ノートを映して書いた図や絵を全体に見せながら発表することで、言葉だけで説明するよりも目で見て分かるというメリットもあった。さらに、黒板に書く時間が短縮され、その分、発表できる子どもの数が増え、多くの練習問題に取り組むことができた。

### (2) 国語「モチモチの木」での実践（12月実施）

#### ①MIMの効果

教科書を一文読みする時に、4月には、読み飛ばしたり、読み間違えたりする子どもが多かったが、MIMを続けたことにより教科書をすらすら読める子どもが多くなっていった。

#### ②学習形態の工夫

グループで考えを伝え合い、その後全体で共有を行った。ホワイトボードを活用し、グループごとの考えを比べて発表することができた。

#### ③動作化

教科書を根拠に発表するグループが多かったが、「ふっとばす」の意味を問うと、分からないという子どもが半数ほどいた。そこで、意味が分かる子どもに動作化させた。すると、どんな勢いで走っていたのかなどのイメージを広げることができた。

#### ④電子黒板の活用

電子黒板に教科書を映し、豆太の様子が分かる文章を一緒に線を引きながら確認したことで、自分では1つしか線が引けなかった子どもも、教員の電子黒板を見て真似して線を引いたり、様子が分かる文章が、たくさんあるということを理解したりすることができた。

#### ⑤毎時間同じ振り返り（スパイラル学習）

この単元では、毎時間「豆太はどんな子？」という振り返りを行った。繰り返し同じ流れで授業を行ったこともあり、普段は振り返りを書くことが苦手な子どもも、振り返りに何を書いたらいいのかが分かり、書くことができた。また、それぞれの場面で、豆太はどんな子が振り返ったことで、場面ごとの比較をすることができ、豆太の変化を読み取ることもできた。

## Ⅲ 成果と今後の課題

### 1 成果

- ・UDを整えることで、学習への参加度や理解度を高めることができた。
- ・UDを取り入れた授業を行ったことで、ほとんどの子どもが評価規準を達成した。また、子どもたちが安心して授業に取り組むことができた。
- ・四則計算や読みの流暢性等の基礎学力向上の取組を行うことで、子どもたちの学習への苦手意識が軽減し、積極的に学習へ向かうようになった。

### 2 今後の課題

- ・教員も子どもたちもまだUDに慣れる段階であった。今後も引き続きUDを意識し、支援方法や環境調整を工夫して取り組みたい。
- ・語彙の少ない子どもが多く、「言葉の力」全体を高めていく必要を感じた。MIM以外のプリントや「コグトレ」などを使用し、語彙力や聞く力の向上を目指すようにしている